The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	建築という芸術の提唱者、中村順平
Author(s)	南原, 七郎
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 47-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52943
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

建築という芸術の提唱者，中村順平

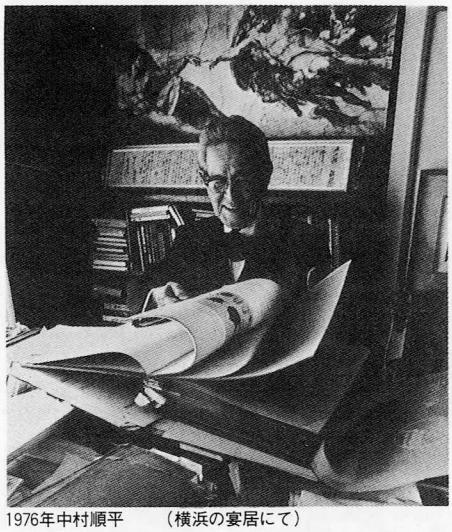
南　原　七　郎

はじめに

1992年という年になって，世紀末を遅蒔きながら，やっと体験しつつあるが，評論家堺屋太一は，次の世代を予想して，セビリア万博と，バルセロナ五輪，スペインを舞台にした2大国際行事は，過去のような万博での科学技術の進歩を誇示するハイテク展示が影をひそめ，芸術性や内面性をテーマにしている国が目立つと述べている。時代は，内面性を重視する芸術に関心が向っているようにすら見える。世界の思潮の下にある近代建築の日本的表現を自己の芸術的感覚の良心で表現するため思索と教育に自己の純枠な情熱をかけた中村順平を偲び乍ら，私達が忘れつつある日本についての彼の意図について考えて見たい。

名古屋高工時代

中村は絵画，音楽が好きであった。天王寺中学の3年生の時，中之島に府立図書館が格調高いルネッサンス様式で野口孫市設計で開館され，非常に魅力を感じ，5年生の時この図書館で，高山樗牛全集第1巻美学及美術史で，「日本の社寺建築を新時代の建築として範とすることは出来ない」と述べ，「新しい様式を確立せよ」と説く，「その日まで他の日本美術の創造はあり得ず，建築



1976年中村順平　（横浜の宴居にて）

名古屋高等工業学校卒業設計1910
「京都嵯峨野の某紳士住宅」

こそ時代の旗手たれ」と結ぶのを読む。即ち建築は諸芸術の綜合であると理解し，ラテン語の Architectura が「諸芸の王」を意味することを中村は受け止め，尺八を都山流の祖中尾都山について学んでいたが，師から「建築は芸術でっせ」の一声で肩をポンと叩かれた思いで建築へ進む決心をした。当時建築を学ぶには工部大学（現東大），東京職工学校（現東工大），工手学校（現工学院大）それと名古屋高等工業学校（現名古屋工業大学）の4校だけだった。名高工だけ絵の試験があるらしいとの友人の話で，ここを目標にした。課題はアカンサスの葉模様の模写であった。中村は余裕ある時間で完成した。これが学内で評判になり，先輩の中でも評判が立った。建築学科の初代科長鈴木禎次は後に中村が非常に恩を受けた先生であり，献身した中条精一郎より2年東京帝大の先輩であった。鈴木は1つの使命感をもっていた。それは真の建築家を養成することであった。彼は精力的に教育に当り，不適当な，素養のない学生に向って「君は建築家になる資格はないよ。法科にでも替り給え」と職業を替えさせられ，それで大成した学生が多かった。落第させることに容赦はせず，卒業時にはクラスは半分になっていたといわれる。この熱意は中村も継いでいて，横高工建築科長となった時にも，建築学科（本科）に入学を志望する青年諸君への注意として，「…次に述べる事柄を注意深く読んで，よく腑に落ちた上で諸君の前途の方向を定めなければ啻に入学手続が無駄骨折りになるばかりでなく，折角入手して

も修学が不可能であり従って将来真の建築士にも成り得ずして，国家又は世界人類文化の為にも無益な事になるかも知れない。…勝れた写生画家でない限り，諸君は建築士として志しても大成の見込みが全くないのであるから，始めから入学を志望しない方が本人の為めである。」とすら書いている。後に大正7年に武田五一は名高工の校長となっている。中村の卒業設計は「…某紳士住宅」で田園の別荘らしいアール・ヌーボー風の詩情あふれるものであった。

中条精一郎との出会い

1910（明治43）年，関西府連合共進会が名古屋で開催され，その打合せのため中条は共進会の鶴前公園奏楽堂，噴水塔を担当していた鈴木禎次を名高工を訪ねた。かねがね依頼してあった新人スカウトの為めであった。名高工で中村の抜群の才が認められ，中村は当時鈴木教室にあったエコール・デ・ボザールのコンクール集を見て「俺はフランスに行くんだ！」とあこがれ，鈴木も亦「君はフランスに行って勉強すべし」と勧め，中条が中村採用を告げた折，鈴木は「フランス留学のこと，よろしく頼む」と就職の条件として念をおした。中村にとっては中条は何ものにも変え難い恩人だった。横浜高等工業学校々長鈴木達治は，「煙洲漫筆」で中条の死んだ時の中村をこう書いている。「中村君は或る時私の宅を訪れた。玄関まで迎えに行くと常ならぬ顔色をしている。私に一礼すると中村君は言下に，中条先生が死んだと泣き出した。終いに座に上らず玄関から泣きつゝそのまま帰ってしまった。私は慰め様もなかったが，後を見送りそのまま玄関に立ち乍ら何んと純情な人であろうと痛く私を感激せしめた。」中村は純粋で，感激家，熱情的な人格であったと想像される。中村は横高工時代に鈴木校長に公私共大変理解と世話になったので，先生の遺徳をしのんで先生に「名教自然碑」を設計している。

東京・大正博覧会

1914（大正３）年大正天皇の即位を寿ぐ儀式として大正博覧会を３月20日から６ヶ月の会期で東京市会で可決。上野竹之台を第１会場とし曽禰中条事務所が正門から全総合計画を受け持ち，中条は中村に帝大を卒業したばかりの西村好時を補佐に総指揮にあたった。当時は新古典主義の批判からアール・ヌーボーの運動が日本全土に主としてグラフィック・デザインを中心として大きな影響を与えていた。1897（明治31）年ウィーンでは、オットー・ワグナー，クリムト，ホフマンを中心とするウィーン・セセッションが過去の様式から分離するという宣言が行われていた。中村は大正という新時代にふさわしい明治と異なる過去の様式から開放された現代の様式セセッションで統一しようと，気宇壮大な新時代開幕を讃歌すべく，第１会場正面は見上げるばかりに垂直に天を摩す，しかも叙情溢れるまぎれもない中村の形態のセセッション風の門とした。之はわが国にセセッション装飾が紹介された最初のものとして近代建築史上に記録されている。日本分離派が結成されたのは，これより遅く1920（大正９）年であり，それだけ日本は情報でも知能でも遅れをとっていたが，中村は1920年にはフランスに留学したためこのグループには入っていない。日本はこの時代は新古典主義が元老達の主流をなしていたのだろう。又1913（大正２）年開催のサンフランシスコ万博に日本政府から出品する工芸彫刻の陳列ケースと場内に備える机，椅子のコンクールが農商務省主催で行われた。この時中村は二等当選，同席に本野精吾がいる。一等は倉持宰であった。

如水会館

1919（大正８）年，如水会館が曽禰・中条建築事務所で行う。設計監督は洪洋社刊の「如水会館図集」によれば，設計監督，工学博士曽禰達蔵。工学士中条精一郎。製図主任，中村順平。現場主任，城戸寿喜となっている。外観はセセッション的単純平滑な面と鋭い屋根の稜線は，多分にアール・ヌーボー的容

貌を盛るべくデザインされ，白タイルにつつまれ，屋上庭園が球戯室の屋上にあり，円形奏楽堂と蔓棚があり，酒場及び球戯室に，三宅鐫吉の筆による森林を練り歩く〝パン〟の行列が描かれ，後年中村が芸術院会員に推されたその祝賀の席（1976年）で村野藤吾は「自分がまだ学生の頃，如水会館を見た。その造型力の素晴しさには，唯々感嘆のほかはなかった…」と献辞を贈っている。又如水会館を見て建築家になろうと決心した人々の話はよく聞く所で，当時非常な感激を若い人に与えたことが判る。然し，後年横高工の製図室で7，8人の学生達が輪になって，洪洋社刊の前記図集を見ていることが判った中村は，全く唐突に「しまい給え。そんなもの見ちゃあいかん！」と吐いて捨てるような叱咤が飛んだ。過去の図集に一顧の関心さえ許さないとする厳しい姿勢で，遠い過去の引出しの奥に納めておきたい自分の胞衣であったに違いあるまい。その後，例え茶飲み話にしろ如水会館の話を持ち出すことは，教え子達にとってはタブーだったのである。

如水会館（1919）

国会議事堂懸賞競技

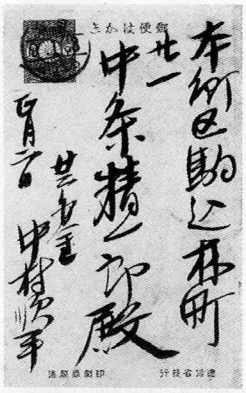
1918（大正7）年，9月中条は日本郵船本社新築工事準備のため渡米調査に出立した。この年の9月，永年待望の国会議事堂懸賞競技が公募された。中条は，如水会館の仕事に取りかかっている最中であったが，この制作に取り組み平日の夜と休日の全てを投入した。桜井を初めとする若手所員が応援に駆けつけた。作品は第1次入選に名を連ねたが，どうしたことか中村は，あっさり棄権している。この競技設計は，久しく公開競技の是非が論争され，様式論が

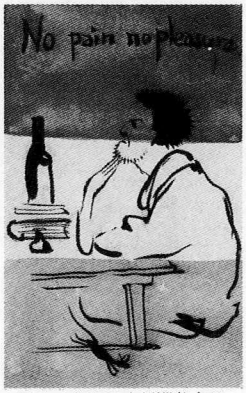
云々され，着せ替え人形ショー然としたお祭り騒ぎで蓋を開けた。これらの審査員は明治後期から大正初期に活動した人々であったため，１等当選案は折衷様式の系統に属するものが多かった。国会議事堂は1920（大正９）年から15年余りついやして完成した。これらは後に新しい建築家達から，コンペティション・スタイルと悪口を言われるものであった。結局設計変更が沢山加えられて，大蔵省営繕管財局により完成し，競技設計の意味がどうなったのかを問われるものになった。明治の立憲君主国日本の議事堂を規定する確固とした哲学も理念もない甚だ観念的な表現衣裳（意匠）をどうするかの競技でしかなかった。中村はその教え子達にも，この競技に触れた話を全くしていない。こちらから網戸武夫らが水を向けても「貰った金は，パリに発つ時，大阪の父の処に置いてきた」とそれきりで，身にも心にも何１つ刻することはなかった。

建築学会創設

建築事始め以来の元勲達は，イギリスの建築家J.コンドルの教育によってルネサンス以後ヨーロッパに定着したアーキテクト像（諸芸の王者）を身につけて成長し，現実には造家を対象としながらも，建築家たるべき人格を克ち得た衿持は大きかった。日本ではこの訳語が長く未決定のままであった。だが1920（大正９）年代はローマン主義的精神と実践とが，機械主義の台頭によって後退し，19世紀には保たれていた両者の調和と均衡とが失われ始めた時代であった。即ち1916（大正５）年佐野利器によってまとめられた「家屋耐震構造論」は木構造の合理化，耐震化を契機として発展させた時代であった。だが1923（大正12）年の関東大震災で，J.コンドルに教育された辰野金吾の煉瓦造の東京駅はビクともしなかったが，佐野の耐震構造の設計の建築は損傷したので当時はその噂で持ちきった。だが佐野は「美は実利に従属すべきもの」と言うが，バウハウスの宣言にも「バウハウスは統一に向ってあらゆる芸術創造の集中に努め，新しい建築に向って，その不可分の構成要素としてあらゆる工作

芸術部門の再統合に努める」とその目標を明確に謳っている如く，大芸術としての建築の尊厳をドイツでも高らかにかかげている。中村が建築学会に準会員として入会したのは，名高工の2年在学中，土屋純一助教授の推薦による16名の在学生の中に名を連ね，副会長が曽禰達蔵であり，中村は学会のコンクール応募にもよく応え，例会総会へも出席繁く忠実熱心な会員であった。だが大正期になり性格が大きく変革され，1914（大正3）年，英国王立建築学会の組織に倣って，日本建築士会の設立となり，1917（大正6）年社団法人として成立する。建築家の職能団体である。しかし中村は自己の信ずるアルシテクチュールの土壌を見失った人々への反骨の意志表示であろうか，パリから帰国後脱退届を送達している。建築学会がにぎる建築史上の記録からこれ以後一切中村の名は記されなくなる。





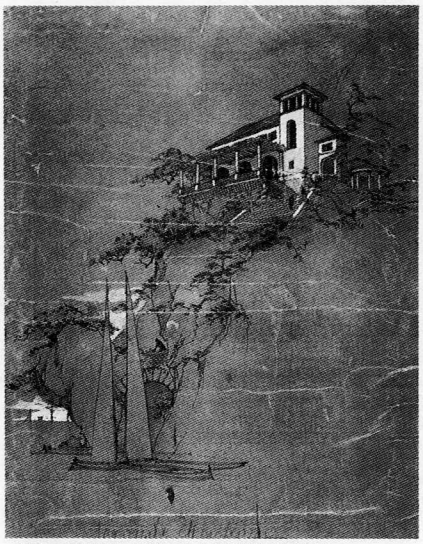
1920年中条宛の中村滞仏中の年賀状と自画像

パリ留学

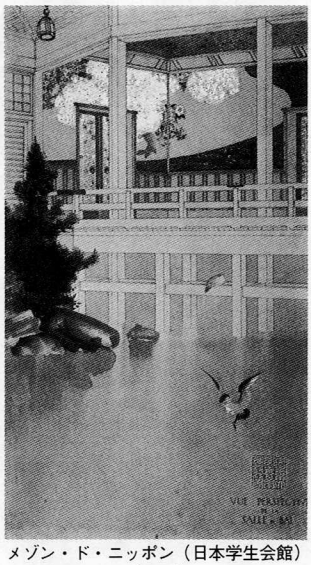
中村は岩崎小彌太や中条らの援助でパリ留学が実現した。1920（大正9）年神戸より熱田丸（8000トン）の処女航海の船で出港す。7月31日発で9月12日マルセーユ港上陸。当時パリの日本人の中には建築家古宇田実，洋画家児島善三郎，藤田嗣治，石井柏亭，和田英作がおり，日本人会の画家には川島理一郎，足立源一郎，坂本繁二郎，太田三郎，他に里見，硲，中山，東郷，木下の名が見える。仏文学者内藤濯は，その随筆集の中で当時の中村を語って「…パリの学生街の大通りのある支那料理店で，ふと落ち合ったのが縁のはじまりで，二言めには〝紫宸殿の今にも舞い上りそうなあの屋根の形が実にすてきだなァ〟とパリの真中で言い乍らよく私と食卓を共にした人に中村順平という人がいた。私が横浜の建築科の講師としてフランス語を教えるきっかけとなったのはその人との出会いからであった。」

エコール・デ・ボザール

世に言うボザールは，École Nationale Supérieure des Beaux-Arts Paris といい，パリ国立最高美術院，略称パリ美術院という。19世紀後半アメリカは文化移入の手本をフランスに求め，ボザールに多くの留学生を送った。アメリカは独立後の官庁建築はアメリカ人の手でというところで続々建築の勉強にボザールに若者を送り込み，彼等が初期アメリカ建築の多くを手がけている。アメリカがフランスに学んだ如く，フランスはイタリー・ルネッサンスの影響を受け，ルイ14世王朝期即ち17世紀後半独自の様式を創造するに至った。当時の宰相コルベールによりその発祥は1671年に遡る。1816年に絵画，彫刻，建築の他に版刻を加え４科にして発足す。1671年から1968年の５月革命で学制改革が行われるまで300年の長期に亘って，フランスは勿論ヨーロッパ全域，遠くは極東中国，南北米大陸にその教養をここに学んだ若者を媒介にして浸透させた。基本的にはイタリー・マニエリスムの芸術理論があった。「伝統とは，人間が受け継ぎ，人間が創り，人間が生きること，ボザールは建築家の歴史であり，その人達の信じた教養の歴史でもある」中村はここで学び育つ作家であればこそ「歴史は人が創るものだ」とする認識をもち「様式とは全ての作家が胸に蔵する己れの理想を，常に１つの原則によりながら，これらを表示したために他ならぬ。まことに芸術とはかくあるべきものであり，芸術上の〝様式〟とは，このようなものを指してこそ，初めて名付けられるものである」といい切っている。日本では建築家でボザールに入学したのは中村以外には知らない。洋画家では山本芳翠が1878年，ボザールに入学し，グラフィック・デザイナーの里見宗次は1923年に入学している。ボザールで最も重要視される12時間建築設計競技が入学試験の冒頭志願者一斉に行われ「一番は15点のロシア人，２等は14点のアメリカ人，３等は俺とスイス人で13点」とだけ日記に記せられている。卒業設計は「メゾン・ド・ニッポン」（日本学生会館）で，異国フランスに在って，止むに止まない日本人の自負が結実した作品で，翌年中村帰国後，春のサ



「南国の別荘」ボザール入学後最初の12時間エスキス
師のロジエ・エキスペールは早くも中村の才能を見出した（1921）



メゾン・ド・ニッポン（日本学生会館）配景図中庭より（1923）

ロンで賞讃の声を浴びて銀賞の栄に輝いた。帰国後の11月にフランス政府公認建築士，D.P.L.G. の称号を受けた。之は日本では中村順平のみと聞いている。中国の清華大学はボザール学派の影響を強く受けている。

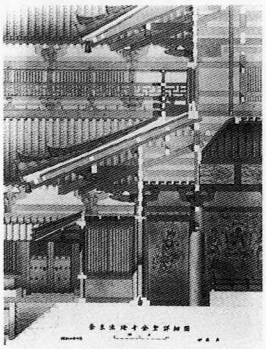
関東大震災後の東京復興計画

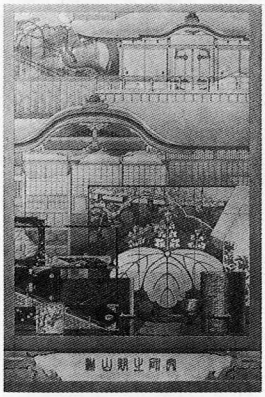
中村はボザール留学中，９月初め師とあおぐ中条から東京壊滅，直ちに帰国せよとの至急電報を受けとった。彼は公認建築士の資格を得るための設計計画の提出を急がれている最中だった。維新で江戸から東京となり，大正期になり東京の都市計画は資本主義の都市としての都市改造と共に野放図且つ急激な都市膨張への対応策，市街化に立って郊外の都市基盤整備を迫られ，本当の意味での近代都市計画が必要だった。1872（明治５）年銀座煉瓦街はパリを目指し，1885（明治18）年にもパリのバロック都市を考えていた。1886（明治19）年ドイツから建築家を招聘し，日比谷官庁街計画を行った。これはプロシヤ憲法をモデルとした帝国憲法につながっていたが機が熟さなかった。1919（大正８）年政府は欧米の制度を参考に土地区画整理地域等を含む都市計画法を裁定，

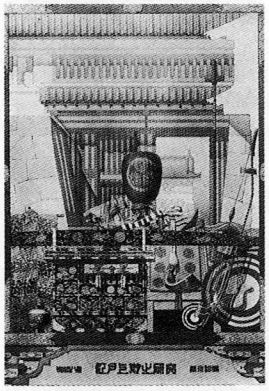
大東京市復興計画平面図（1924）

1922（大正11）年都市計画区域が設定され「大東京計画」の本格的な策定作業が進められ大正12年には，地域指定の準備がととのい，土地区画整理設計もほぼ出来上った。この計画を強力に推進したのは当時の東京市長，後藤新平で，後藤は大正10年４月に市政要綱に「八億円計画」を市参事会に提出し，大風呂敷の異名をとった。この新しい計画が緒につこうとした矢先きに大地震が襲った。この後藤は中条の父が県令時代に書生として世話を受けたことがあった。そのことで中条がフランス留学中の中村に千載一遇のチャンスとして呼びよせたのだろう。中村は1922年にル・コルビュジェのユルバニズムで，長さ６ｍに恒るパリ大都市計画のパノラマ図に大きな衝撃を受けていた。コルビュジェの理想的都市計画は「未来における一国の都市はかくなるべきである」という理想案であった。中村は小冊子「東京の都市計画を如何にすべきか」で自己の計画を述べている。それには「ニューヨーク以上に活動能率を，パリ以上に健全な精神生活を営める，世界最大新進国を誇る一等国の首都たれ」とし，中村の樹てたパルティ（Parti　根本方策）の上に具本化された構想の中，不動の中心軸上に中央駅と国際空港もってきて，日本の首都へのメインストリートとし，その美観と堂々とした首都の貫録を示していた。

当時建築家が都市計画まで考える余裕のない時代であったが，中村の努力にもかかわらず，震災復興計画は後藤新平内務大臣のもとで，焼失地復旧のみにとゞめず，全市域を改造する案が進められたが，現実離れなどの理由で逐次縮少された。その後かえり見られることは防空都市と国土計画とが，建築家及び美観とは関係ない所で進められ，今次戦災を受けるまで美観等は考えられることはなかった。中村は小冊子に「若し自分の提案が，このまま葬り去られることあらば，せめて後世に当時の建築家にして，自分の意志を明白にしておきたい。」と己れの責任と義務を明記し，後世への表記を示している。だが中村の熱情と能力をもってしても，何故か日本の近代文化史にも，近代建築史にも，都市計画史にも記録されずに今日に来ているのはどうした事であろうか。


学生による建築図画
法隆寺金堂断面詳細図


建築図画桃山時代の美術


建築図画江戸時代・上期の美術

建築図画，学生の東京オリンピック，忠霊塔コンペ応募

横高工の入試では，受験写真の鉛筆リアル写生，次に学科試験が1日，次いで9時から午后4時まで石膏デッサンで，石膏は毎年新しいものを輸入している。これはボザールの入試テストの12時間デッサンを思わす。それで横高工の建築科へはデッサンが抜群に出来ぬと駄目だといわれ美術学校並で美校を受験するつもりの者も受験したりした。受験生の集会所の四面の壁に在学生の描いた大きな絹張りの上に墨の濃淡で描いた「建築図画」がとり巻き受験生をどっきりさす手が使われた。こんなものが描けないようだと入学を許可しないぞという中村の声が聞えそうである。定員は30名で，これは鈴木校長が，中村の主張する5，6名と文部省の40名との中間の折合いの結果で，又「三無主義」という珍らしい方法がとられ，中学の校長が推薦する中から選抜したのだから悪い学生はいないだろうという考えかも知れないが，無試験（進級試験がない），無採点（採点はしないが，批評はあったろう），無処罰（欠席しても罰せられない）という自由主義であった。全て学生の自覚の上の猛勉強を，情熱を持たない者は建築家になるなという教えだったのだろう。建築図画については「建

築家の創案を細部に至るまで，色彩，精神が窺え保存が便利な最も理想に近いものは，Le dessin d'architecture 以上実際的な方法はない。訳して（建築図画）である」といっている。ボザールの方法かも知れない。中村はこれを通して日本の建築の各時代毎の美しさを体験させようとしたと思われる。

1940年は東京オリンピック開催を予定して各大学での会場の設計コンペが盛んに行われ，1939年新建築モニュマン特輯号で忠霊塔応募図案設計が発表されこの入賞者は国際建築1940年に発表され，東京の百貨店で展示され，日本の建築家も規模雄大な作品の気風が生れた。その中に早稲田，横高工，美校，東大，日大の学生作品があったが，中村の教え子の作品はその中でも出色であった。

芸術祭行進

横高工では開校以来創立開校記念行事，今でいう学園祭を行い，建築科の芸術祭行進はハマの名物となり，伊勢崎町通りをねり歩き，これは学生にとっては，芸道に入るための割礼の儀式であった。「青年よ。感激家たれ！」との中村の要求は学生達に一生忘れられぬ感喜を植えつけた。第１回は1928年から第８回が1936年まで行われ，それ以後は時局で中止。1940年は皇紀2600年記念パレードで上京したのが最後になった。夕刻校庭に持ち込まれた山車は火につつまれ青春の歓喜の絶叫と共に終る。中村がパリでの留学中の芸術祭行進がパンテオン広場に到着すると忽ち山車に火を放って学生全員が周りにロンドの輪を描いて踊り狂う。この歓喜を自分の学生に伝え，芸術家とはと教えようとしたのかも知れない。最後の東京でのパレードはニュース映画にもなった。

国際連盟会館の設計競技

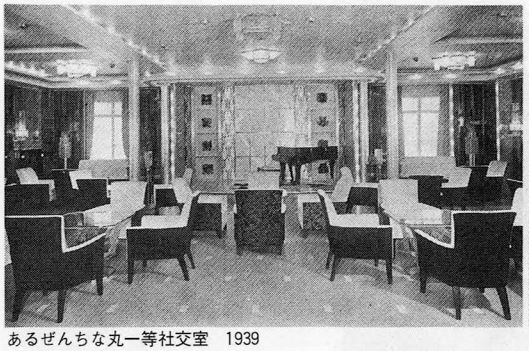
1918年11月11日第１次世界大戦が終りヴェルサイユ条約により翌年国際連盟が成立し，1927年ジュネーヴに建つ建物の国際コンペが開かれ世界各国の建築家が337の案をもって参加した。中村は1926年盛夏のコンペ発表から翌１月の

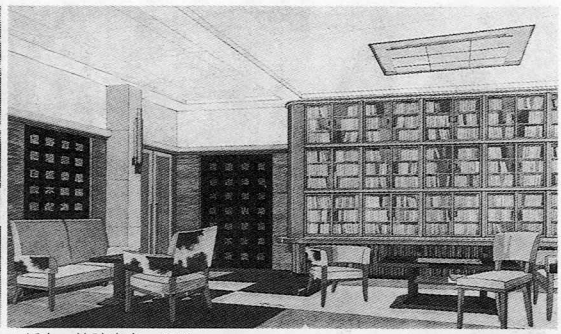
第６回記念祭コスチューム　(1934) デザイン　中村順平

締切まで制作を行う。我国としては初めての国際コンペ参加はボザールに留学していた中村にとっては恐れるものではなかったが，日本の外務省は自国の応募者に対する手続きが不馴れで不得手だった。このコンペは，二等のル・コルビュジェ＋Ｐ・ジャンヌレの案が有名だが，他にハンネス・マイヤー，ノイトラ等が特徴ある設計を出した。結果は政治的，祝典行事となり１等はフランスの長老ネノの新古典様式で，近代建築グループの作品は採用されなかったが20世紀の建築に無視し得ないものであり，新しい建築思想の苦難の時代だったといいえよう。中村は「時間がないんだ。40才になったら…」と心の中の葛藤を表している。39才だった。

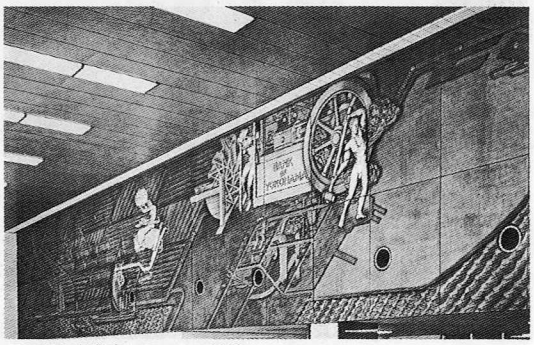
インテリア及船内装飾・壁画レリーフ

日本は明治以来イギリス及びフランスのデザイナーに船内装飾を依頼していた。船内装飾は日本文化を表現したインテリア・デザインを世界に示すものであった。中村は1926年に大阪商船天津航路「長城丸」階段室。1927年岩崎小弥太邸の食堂，談話室のインテリアを手がけている。1927年に日本インターナショナル建築会が上野伊三郎，本野精吾らによって生れる前である。その後


あるぜんちな丸一等社交室　1939


八幡丸一等読書室　1940

橿原丸ラウンジ　1941


横浜銀行営業室レリーフ　1960

「ぶえのすあいれす」丸。「りおでじゃねいろ」丸。「うらる」丸。「うすりい」丸。「高千穂丸」「熱河丸」「吉林丸」。「にしき丸」「こがね丸」「鴨緑丸」を経て「あるぜんちな丸」を設計している。非常にシャレたフランス風，又「八幡丸」は東洋風の素晴しいデザインで驚かした。「新田丸」「春日丸」と日本の造船能力は高まり世界一周船日本郵船の豪華客船3万トンの「橿原丸」のラウンジに日本の芸術を世界に示すようなデザインがなされたが，第2次大戦となり空母隼鷹に改装され撃沈される運命となる。戦後米軍の鉄道輸送事務局の直轄下の東京駅の1・2等待合室の壁画レリーフを大泉博一郎などの勧告で東海道綿絵調の絵巻風に完成，GHQは讃辞をおしまなかった。その後横浜の日本貿易博，横浜銀行，山口銀行，岡山市庁舎のレリーフを完成，船内装飾した船は22隻にのぼり「先進の西欧諸国に絶対に負けられない。」という信念があった為であろう。1977年NHKの「スタディオ102」に出られて2ヶ月後に亡くなられた。

参考文献

- 新訂建築学大系６。近代建築史，編者建築学大系編集委員会，彰国社刊，1971
- 建築学大系２，都市論，都市論，住宅問題，建築学大系編集委員会編，彰国社刊，1978
- 建築概論，建築概論編集委員会編，彰国社刊，1977
- 建築学・総説篇，中村順平著，土木雑誌社刊，1944
- 建築という芸術，上巻，中村順平著，相模書房刊，1978
- 建築という芸術，下巻，中村順平著，相模書房刊，1978
- 情念の幾何学／形象の作家中村順平の生活，網戸武夫著，㈱建築知識刊，1985
- 煙洲漫筆，鈴木達治著，煙洲会刊，1951
- かべがみ No.90。壁装材料協会刊，1978，９月号
- 日本インテリアデザインⅠ，日本のインテリア100年，泉修二，中村圭介，日本室内設計家協会出版委員会，敬文堂出版部刊，1968
- 如水会館，洪洋社刊，1919
- 建築家。人と作品下，川添登著，井上書院刊，1968
- 1920年代日本展，東京，山口，兵庫県立近代美術館，朝日新聞社編，朝日新聞社刊，1988
- 日本文化論，梅原猛著，講談社学術文庫，1976
- 週刊朝日百科，日本の歴史111，朝日新聞社刊，1988
- 美術手帖小事典，デザインの歴史と用語５月号増刊，美術出版社刊，1968
- 新建築，15巻10号モニュマン特輯，1939

（みなみはら・しちろう）

中村順平略歴

西暦	元号	年齢	こ　と　が　ら
1887	明治20	0	８月29日，大阪市西区江戸堀南通り３丁目に生まれる。父中村譲芝は東大阪市池島の旧家中村家の出身，母そのは浪花の医家山口家の出身譲芝とそのは三男二女をもうけ，この末子が順平である。
1902	35	15才	尋常４年，高等４年の小学校を終えて大阪府立天王寺中学校に入学。中学生にして尺八を中尾都山に師事。都完の名をうける。その頃中之島に日本銀行大阪支店，府立中之島図書館が建ち洋風建築と御影石の美しさに魅せられ，建築家になる意思を示す。
1907	40	20才	名古屋高等工業学校建築学科に入学。当時，建築教育の行われた学校は工部大学（東大），東京職工学校（東工大），工手学校（工学院大），それに明治38年設立の名古屋高等工業学校（名工大）のみでした。
1910	43	23才	名古屋高等工業学校卒業。曽禰，中條建築設計事務所所員となる。曽禰達蔵は工部大学第１回卒業の我が国建築界の大先達である。中條精一郎ら東大卒業後，ケンブリッジ大学に学んだ建築家である。
1914	大正３	27才	東京上野公園で催された東京大正博覧会の第一会場全体の配置と各陳列館の設計一切を任されて設計監理を行う。
1918	7	31才	北海道開道50周年記念博覧会会場の建築設計を行う。
1919	8	32才	東京一ッ橋如水会館建築設計並びに室内設計を行う。
1920	9	33才	黒田清輝，中條精一郎の示唆激励と岩崎小弥太の援助を仰ぎフランスに留学。
1921	10	34才	国立パリ美術院（エコール・デ・ボザール）に入学。試験科目は12時間エスキス，12時間彫塑，12時間デッサン，２時間図学，２時間数学筆記試験，２時間歴史筆記試験，物理・化学口頭試問，数学口頭試問，歴史口頭試問，最終まで残った194人のの中，外国人として異例の設計実技第１席，学科に第２席を得て審査教授を驚かす。入学後，最初のコンクール（競技設計）の課題「南国の別荘」エスキスで第１位「体育館」でエスキス及び本設計で１等賞。
1922	11	35才	「電気学校」のエスキス及び本設計最高賞，その他所定の競技設計の入賞数を獲得して国立パリ美術院をおえる。
1923	12	36才	「パリ大学，日本館」の設計を行い，この建築設計を卒業制作として提出。これより「フランス政府公認建築士」の称号を与えられる。この年９月１日関東大震災。
1924	13	37才	１月帰国。国民美術協会主催帝都復興創案展に「大東京復興計画」を出品。「東京の都市計画を如何にすべきか」を自費出版し，鉄道会館にて発表講演する。
1925	14	38才	国立横浜高等工業学校に建築学科開設に伴い同科の主任教授として赴任。建築芸術教育を開始。「建築学科に入学を志願する青年諸君へ」のパンフレットを作って建築士となるべきものの心構えを教え，また建築学科の講義内容を月刊雑誌「建築世界」に連載した。東京日本橋に中村塾を開設，建築士を希望するものの教育道場とした。

1926	大正15	39才	ジュネーブ国際連盟会館設計競技に応募。大阪商船天津航路「長城丸」船内装飾設計を行う。
1927	昭和2	40才	東京麻布に新築中の岩崎小弥太邸の食堂，談話室の室内設計を担当。日本の伝統工芸技術を生かした新様式を創造する。
1928	3	41才	フランス文化交換協会主催のフランス美術及び室内装飾展覧会の委員として尽力，フランス政府からオフィシェル・ダカデミー勲章をうける。この年国立横浜高等工業学校建築学科は初めて卒業生を出す。
1929	4	42才	大阪商船南米航路「ぶえのすあいれす」丸，「りおでじゃねいろ」丸，大連航路「うらる」丸，「うすりい」丸の船内装飾を設計。
1934	9	47才	大阪商船台湾航路「高千穂丸」船内設計
1935	10	48才	大阪商船大連航路「熱河丸」，「吉林丸」船内設計
1936	11	49才	大阪商船別府航路「にしき丸」，「こがね丸」室内設計。
1937	12	50才	大阪商船「鴨緑丸」船内設計。
1939	14	52才	大阪商船南米航路客船「あるぜんちな丸」ラウンジ設計。
1940	15	53才	日本郵船北米航路客船「新田丸」，「八幡丸」，「春日丸」船内設計。
1941	16	54才	NHK 文化講演「日本建築の性格」をフランス語で海外放送。日本郵船豪華客船「橿原丸」ラウンジ設計完了するが戦争のため空母に改装され実施中止。
1943	18	56才	学校における講義原稿を一巻として「建築学総説編」を土木雑誌有明書房より発刊。
1945	20	58才	4月首都空襲激化のため居住先の東京大森ホテルから横浜へ移転。5月29日横浜大空襲により寓居焼失。6月2日三重県一志郡川口村へ疎開。川口村において「建築学」「建築という芸術」の原稿資料作成。
1947	22	60才	国立横浜高等工業学校（学制改革により横浜工業専門学校と改称）教授を辞す。東京駅復興工事に当り待合室に大壁画彫刻を設計。完成。
1951	26	64才	横浜市主催日本貿易博覧会に大壁画を設計完成する。
1955	30	68才	「建築学技術編」を相模書房より発刊。「新宿駅付近の将来について」を「新建築」誌に発表。
1957	32	70才	横浜市文化賞をうける。
1959	34	72才	日本芸術院賞をうける。
1960	35	73才	横浜銀行本店営業室に大壁面彫刻を設計実施する。
1961	36	74才	「再び東京の都市計画について」「新建築」7月号。著書「建築という芸術」彰国社より刊行。
1964	39	77才	山口銀行本店に大壁面彫刻を設計実施する。
1968	43	81才	建築教育の大道を説いて「巴里美術院」を「新建築」に連載。
1969	44	82才	岡山市庁舎漢詩壁面装飾を設計する。
1972	47	85才	東京ブリジストン美術館で講演。
1974	49	87才	米寿記念建築図画展を東京・大阪・広島・福岡にて開催する。
1975	50	88才	日本芸術院会員に任命される。
1976	51	89才	勲三等瑞宝章をうける
1977	52	89才	5月24日逝去。墓所は東大阪市の六万寺往生院にある。

中村順平年譜，中村家の資料により東大阪市立郷土博物館が作成